

米山梅吉記念館 報

2009

(平成21年)

春

Vol. 13



従吾会のメンバー（写真左から角田浩々、石川半山、米山、稲村真里、遅塚麗水）

人は誰しも、若い頃に知り合い、同じ場所で同じ時を過ごした人に対し、特別な仲間意識が生まれるものである。沼津中学で友人になった米山梅吉、稲村真里、角田浩々。そして、米山が渡米前に住んでいた愛宕町時代に知り合ったと思われる遅塚麗水と石川半山。青春時代を共有した5人の若者は、米山がアメリカから帰国後、従吾会という会をつくり、終生変わらない交流を続けた。「5人が勝手に話し合う従吾会」ということである。メンバーの一人稲村が「情味が中心の連類となり従吾会が出来、一生つづいた」と語るように、男同士の友情は固く結ばれていた。

米山は実業界での顔の広さはもちろんであったが、その他にも趣味の漢詩、俳句、和歌などでも、様々な人と交わった。従吾会、そして俳句の会である白人会への参加もその一部である。従吾会と白人会については、本文濱田氏の稿に詳しい。



財団法人 米山梅吉記念館



館報第13号発刊に際して

理事長 渡邊 脩 助

米山梅吉記念館からご挨拶申し上げます。

全国のロータリークラブ・ロータリアンのご支援によりまして、米山梅吉記念館も創立40周年を迎えることとなりました。心より感謝とお礼を申し上げます。

理事長に就任してまだ一年ですが、特に感じたのは、当記念館をロータリー米山記念奨学会の附属施設と誤解しているロータリアンが非常に多いということです。

日本のロータリーには米山を冠名にした2つの組織があります。それは米山記念奨学会と米山梅吉記念館です。奨学会は全日本ロータリーがかかわる巨大財団で、在日留学生への育英事業を目的とする文部科学省の認可の組織です。一方当館は日本のロータリーの創始者、米山梅吉翁を記念し、ロータリー精神の普及を図る目的で、R1第2620地区（静岡・山梨）の静岡東部11ロータリークラブが主になって、昭和44（1969）年、静岡県教育委員会の許可で設立された小財団で、財源も運営も全く異なる組織です。

もちろんロータリーの精神は変わりません。在日留学生に国際融和を、ロータリー精神を、言い換えれば米山精神を学び、会得して帰国、将来のリーダーになって貰う教育的プログラムは奨学会にも必要だと思いますし、その為には米山記念館はいささかでもお手伝い出来る施設だと思っております。そして全国のロータリアン及びその関係者を受け入れる日本唯一の施設でもあります。

館の年間の恒例行事に春と秋の例祭があります。春は米山翁の命日、秋は館創立記念日に行っております。

今年の秋の創立記念例祭は40周年記念行事を計画、只今準備中です。日時は平成21年9月19日（土）に予定しております。

35周年記念祭は盛大に行いましたので、現在の経済状況を考えて、できるだけ簡素に心掛けております。

全国各クラブは新年度に向けての準備で日々多忙のことと存じます。皆様も御承知の通り、残念

ながら会員の継続的減少に歯止めがかかりません。日本の会員数も10万を切り、世界第2位の規模からインドに追い越され、ゾーンも3.5から3ゾーンに縮小されました。更にリーマンショックからの100年に一度の経済恐慌で急速に経済が悪化し、厳しい時代を迎えました。1930年代の米国の大恐慌時の米国ロータリーの苦難の過去の歴史からしても、今後のロータリーに対する悪影響も予想しなければなりません。しかし基本的にロータリークラブは不況に強い団体といわれております。この様な時こそロータリーの理念が私達を励ましてくれるものだと思えます。

館の現状を申し上げます。予てよりの周囲の都市計画路線も実地段階に入りました。今まで不案内であった館への道順もわかりやすくなります。ただ新館完成から10年が経ちまして、方々に修理が生じて来ております。また公益法人化への取り組みをどうしていくか、等々の問題が起こっております。

なんともいっても頭の痛いのは財政問題です。現在記念館を維持するために年間1400万円ほどが必要です。これに対して収入は全てロータリアンからの献金です。当R1第2620地区から会員減少にも拘わらず多大な地区援助資金を頂き、さらにR1第2590地区、R1第2780地区、米山記念奨学会から主な補助をうけております。最近、特に目立つことはスマイルボックスの中が寂しいことです。会員減少にも拘わらず、記念館へのロータリアンの来館は増えております。嬉しいことに移動例会、遠方からの旅行をかねたクラブ訪問も多くなりました。しかしながら入館料のかわりにスマイルボックスを置いてありますが、ご協力が得られません。我々のPR不足からか、不況のためか、奉仕の心、思いやりの心の欠如か、大いに反省しなければならないと思います。

全国からより多くのロータリアン、米山奨学生、並びに一般の方々のご来館を心からお待ちしております。

秋 季 例 祭



■ 日 時 2008年9月21日（日）

■ 会 場 財米山梅吉記念館

● 記念式典

● 記念行事

創立記念祭講演

演題 「三井報恩会（初代理事長米山梅吉）の結核撲滅と救済援助」

講師 〈学〉聖隷学園 理事長 長谷川 了 氏

● アトラクション

音楽会 歌とピアノ演奏

ソプラノ 西田さと子 さん

ピアノ 松岡 直子 さん

● 懇親会



記 念 講 演

三井報恩会の結核撲滅と救済援助

今日私がお話ししたいのは、米山梅吉さんが67歳から75歳、生涯の一番熱誠充満した時代、昭和9年から17年の日本が戦争に邁進しているときに、結核と癩の療養所に関して、米山さん以外では理解、執行できない仕事をなさったことです。

私の父母が、米山さんが理事長をしていた三井報恩会から3回にわたり4700円という大変な金額をいただいた恩がある、ということで、誠実にお話をさせていただきます。

私の両親は長谷川保、八重といい1930年、昭和5年に結核療養所を始めました。そのきっかけは、桑原という青年が結核という理由で浜松の住処を十数カ所追い出され、そのお父さんがこの子の五尺の身体を天地の間においてあげる場所がない、と言って助けを求めて来たことです。そして5人の青年が10円ずつ出し合って自分たちの家を改装してその人を迎え入れ、一緒に生活することから始まりました。

今、グループ全体は15の法人でできており、病院が8つ、福祉施設は200近い施設があります。大学と大学

院、そして高校があります。グループ全体では9000～1万人の職員がいます。たぶん日本のこの分野では一番規模が大きいのです。しかし今でこそそうですが、始まりはたった5人の青年が10円ずつ出し合って始めたことです。

私が米山梅吉さんと三井報恩会のことを知りましたのは2002年です。大学の歴史資料館で、三井報恩会理事長米山梅吉さんが聖隷保養の長谷川保に出した助成金の通知書を3枚見つけました。昭和13年、14、15年です。合計4700円。相当な金額です。

『夜もひるのように輝く』という私の父が書いた自伝によれば、長谷川保を米山梅吉さんに紹介した人は、川上嘉一という人です。この方は昔の日本楽器（現ヤマハ）、その中興の祖といわれた方で、浜松RCの創設者です。

浜松RCは昭和11年2月に設立され、9月に浜松の館山寺でチャーターナイトが行われて、米山梅吉さんが出席されたと記録が残っています。米山さんと川上さんはロータリーを通じての古い親しい仲間でした。川上さんが書いていた日記『随感録』というのがあります。その中に5、6カ所私の父に関する記述があり、その二つを紹介します。

昭和11年5月23日、「浜松市に接した入野村に結核療養所を自ら経営している長谷川という青年がある。・・・話を聞いてみると、肺の重病者を預かっていて、之を

世話する。約半数位治るが、半数位は死亡する……。誰が之を看病しますか、と言うと3人の看護婦が皆無給で働いて居るとの事である。今の世知辛い、欲のみ深い人の世に、あの憂鬱な重病人に身を捧げて無給で一生働かうとする若人達に実際心から頭の下がるのを覚ゆるのである。」

そして昭和15年10月22日には献身の事業として「日本人のよく献身的だとか、滅私奉公と言う言葉を使う。……而してそのなす所を見れば悪臭紛々鼻持ちならず、我利一方のものが如何に多いか。……然るにここにかかげたcorwoll lea女史の如きは、身は相当の家柄に生まれ、資産を持ちながら、……異境の空に伝道して、自己の財産と生涯とを全部、不幸なるライ病患者のために捧げようと決心した。このけなげなる女史の心は実に真の献身である。……私はこの随感録のどこかに述べた聖隷社（三方原保養農園）の長谷川保青年の如きも之に類する型の一人であると思う。」

これらの文章から、川上嘉一さんは長谷川保に強い関心を持ってくださったことがわかります。

昭和5年に始まりました結核療養所は、結核を恐れる周囲の人の激しい迫害により、すでに2度場所を追われ、このベテルホームというのは3度目の場所でした。そのころ次のような事件が起こりました。

北海道旭川から最後の望みをかけてきた肺病の方を受け入れたものの、入所の夜から三日間咯血が続き、亡くなってしまった。家族に連絡をしたが遠く、5日目によく母親が訪ねてきた。腐臭でどうにもならない亡骸にすがりつき号泣する母の姿に、保はもらい泣きし、肉親の愛の深さに打たれ、己の愛の浅さを反省させられた。しかし、このことがあってから村民の迫害がひどくなった。

保は引越しを考え、川上嘉一を訪ねた。このとき川上は「長谷川さん、あなたのことはよく存じています。よくおやりになりますなあ。紹介状を書いてあげますから三井報恩会の米山梅吉さんにお会いになって新しい敷地を買う金を助成していただいたらよろしいでしょう。米山梅吉さんはクリスチャンですから、あなたのお話は聞いてくださると思います」と述べた。これは昭和11年11月のことです。このとき川上51歳、保32歳でした。

すぐ東京に米山さんに会いに行き、後日、静岡県經由で助成金申請書を出しますが、県がこれをもみ消してしまいます。実際代替地は賀川豊彦さんが中心になって日本のキリスト教会から一坪献金といって一坪分の献金を全国から出してもらい、土地を買いました。

三方原に移った後も激しい迫害にあい、昭和14年経済的に破産状態になりました。しかし、12月25日クリスマスの日に天皇陛下から御下賜金5000円が与えられ、天皇様が応援する事業（戦前ですから天皇陛下は神様でした）ということで10年にわたる激しい迫害が終わり、御下賜金と三井報恩会の助成金によって経済的に救われることになります。昭和15年の三井報恩会の助

成金通知書にはご下賜金によって恩賜病棟建築助成金という但し書きがついています。2002年にこの証書を発見して、長谷川保、川上嘉一、米山梅吉というつながりがわかりました。

癩についても大変悲惨な状況でした。御殿場の時の栖、あの近くに神山復生園という民間でできた日本で最初の癩療養所がありました。その開設のいきさつはこうでした。

フランス人宣教師テストが街道を歩いていたところ女性の異様なうめき声を聞き、近づいてみると30代の女性がたった一枚の布きれを身体に巻き付け横たわっていた。事情を尋ねると、結婚、出産し幸せな生活をしていましたが、ハンセン病にかかってしまった。離婚をさせられ子供は引き離されこの水車小屋に押し込められ、一日一度だけ食事が与えられている。これは当時の癩患者のおかれた普通の境遇です。その後もテストは彼女を訪問し、苦しみ哀しみを聞き慰めます。6ヶ月ほどして彼女は洗礼を受けます。そのとき、彼女は病の為にすでに失明し鼻も顔もひどく崩れていたが、その顔は美しく輝いて喜びの涙が流れていた。絶望と悲しみの中で生きていた婦人が神父に出会い、その苦しみの中にあつて希望と喜びを見出したのではないか。その後テスト神父は近くの癩患者を集めて一緒に住むことにした。それが神山復生園の始まりでした。

この神山復生園の100周年だったと思いますが記念誌を頂いて、ある患者さんがこう書いています。「手も足も普段の3倍もあろうかと腫れ頭部も顔面も腫れた。……手は袖の下が黄色く腫み、右手親指の半分を残して切り落とした。腕から肩へと腫瘍ができて破れ、足は甲のところから足の裏へかけて腫瘍ができて腐って破れたが裸同然の姿で治療を受けた。傷に付着したガーゼを交換するとき痛さに涙をボロボロ落とした。」精神的にも肉体的にも想像を絶する苦痛を味わわされたことがわかります。

川上嘉一の随感録に出ていましたcorwoll leaさんはイギリス貴族のご出身でした。1908年、明治41年51歳で来日しました。58歳の時、群馬県草津のハンセン病患者の集落で患者と共に生活を始めました。当時ハンセン病で亡くなった方は、葬式もしないで箱に入れてゴミのよう捨てるのも普通だったようです。

corwoll leaさんが集落に住み着いてまもなく一人の方が亡くなりました。そのとき彼女は白いエプロンを身につけると遺体に一礼をしてから丁寧に湯灌をした。そのことがすぐ集落じゅうに伝わりました。そして行われた葬式には花を持った病者が列をなして参列し棺の中の遺体をいっぱいの花で飾ったのだそうです。

家族を失い世の中からは忌み嫌われ死んでもゴミのように捨てられたハンセン病患者にとって、corwoll leaさんとの出会いは魂を揺るがすほどの感動と感謝を与えたことだと思います。学校に行くことも、町に遊びに行くことも就職して働くことも家族と一緒に生活したり結婚して家庭をもつことも許されないハンセン病

者たちを外国の宣教師が親子のように兄弟のように助けたのです。

話は変わりますが、米山梅吉の新隠居論というのが大正3年に書かれます。47歳のときです。「日本で隠居とは、世の中から蔵れてしまうことを意味するが、西洋人の隠居は、隠居として為すべき幾多の仕事がある。人間は自分の稼業以外に何か社会公衆のために奉仕することがなくては、まだ人間としての義務を十分に果たしたとはいえない。西洋人の隠居後になす仕事はこの意味から社会のためにつくすことである。」大正9年に自ら設立したロータリー活動や、三井報恩会初代理事長に就任した後の活動を考えると、米山梅吉さんの生涯を暗示する大変重要な文章であると思います。

三井報恩会について考えてみたいと思います。1929年（昭和5）10月24日、NYの株大暴落を契機に世界大恐慌がはじまりました。日本も昭和の大恐慌となり、農村では娘の身売りが広がり都会では失業者が巷にあふれました。明治維新後、アジアの国々が欧米列強によって植民地化されるなか、財閥の力で日本が植民地化を免れてきた、こういう意味で財閥はむしろプラスの評価をされていました。この大恐慌を境にファシズムが台頭し、財閥が利益を独占しているという厳しい批判が噴出してまいりました。

このような状況のなか、三井住友三菱等の財閥は「財閥転向」といわれる、利益独占から利益を社会に還元していく方向に転向していきます。そして三井は昭和9年に公益、福祉、文化学術事業への資金助成を目的にした三井報恩会を設立します。当時三井信託銀行の取締役会長、三井合名の理事であった米山梅吉が抜擢され初代理事長に就任します。67歳でした。趣旨について、三井合名社員総会によって「現下国家内外の情勢ますます深刻化せんとするに鑑み、……進んで文化、社会事業に貢献するため資産3000万円の財団法人を設立する。」と決定されました。仮に5000倍とすると今のお金で1500億円、一万倍で3000億円です。半端な額ではありません。

設立後8年間に結核撲滅と救癩のために、一般事業中医療事業への助成金221万円、特別事業中救癩結核関係への助成金305万円と破格の助成をしています。資産3000万円からの収入は利息その他で年間120万円くらいですが、米山さんは結核、癩を緊急事態と考え元金を取り崩し毎年230万円位を用いて、その半分以上を結核、癩に使った。なぜか。それはたぶん結核、癩療養所の現場の本当の姿をつぶさに見て知っていたからです。それを暗示することが『看雲録』に出ています。

「社会事業の最も重要な救療事業の現状は嘆息すべき不完全の状況。結核対策、結核死亡数、患者数、患者増の日本と比較して文明国は死亡数の半減…」とあります。結核の死亡者は1900年と1929年で、アメリカでは20.1人が7.5人に減っています。しかし日本では15.3人から19.6人へ増えています。文明国で増えたのは日本だけです。結核で死んだ100人に対するベッド数は、

アメリカでは112床、日本は8床です。こういうことを米山さんはよく知っていた。続いて「国家は結核の予防撲滅を策し、このためには如何なる巨額の費用を支出することも惜しまざるべき筈で、これを民間の社会事業団体に委しざるべきでない。」と見解を書き「社会事業の助成費わずか50万円如何にも貧弱であり、……要は国民を健全にし、生活を安定せしめ、さらにこれが向上によりて社会の改善を期するにある。かくて武勇奉公の念が振起され、健全なる愛国心が発起されることであろう。この必要は現下の非常時に際して益々感得されるところで、戦時の扶助施設と平時の社会事業とはきわめて密接してその間には溝渠の隔てはないものである。」と述べています。

戦争に日本全体がまっしぐらに走っている時に世界的な視野で客観的、冷静に日本の社会に何が必要かをご存じだった。

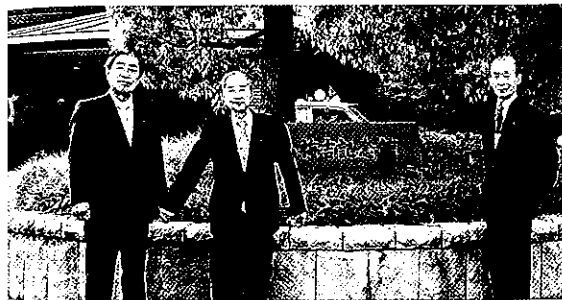
財閥三井報恩会の設立と推移を書いた勝瀬誠さんは「いわば三井財閥の公益部門として三井報恩会は位置づけられていた。しかし実際の運営にあたっては政府、県等の行政諸官庁及び公共諸団体と密接な連携をとって資金助成が行われ政府の社会事業政策の一環に位置づけられた。その政策を先駆的に実験先導し、政府政策に反映させる、あるいは国保、国と公の助成の手のまわらない分野や不足分を補完する役割を果たした。医療地の結核撲滅、癩治療、がん研究への多額の資金助成はその画期的な例である。」と述べています。

昭和17年、三井財閥は三井報恩会の事業人事を見直し、理事長が替わります。そして結核と癩関連からは一切手を引いてしまいます。三井財閥に直接利益をもたらす戦時事業に専任していくことになります。

米山さんは自身が47歳の時に新隠居論を書き、67歳のとき三井報恩会初代理事長に就任され、昭和の大不況から暗い戦争に突入するその時代、最も困難な状況にあった結核や癩療養所に多額の援助をして助けた。米山梅吉さんの奉仕の理想の本質は強い人の味方をするのではない、世の中で一番苦しんで居る人、世の中の日陰で一番疎まれる人を一番大切にしたい、奉仕の理想は無償の与えることにはじまり、困難な人と神に仕えることであったのです。そしてこの時代に勇気をもって実践をした。暗い谷間で涙を流す人たちと共に涙を流し、その涙を拭って希望と喜びを与え続けた人であったと思います。



米山梅吉記念館春季例祭に参加して



例祭に参加した山口RCの3氏 左から山口氏 松永氏(筆者) 松林氏

去る2008年4月29日の記念館春季例祭に出席致しました。参加者は委員長の山口一紘氏と雑誌会報委員長の松林圀良氏、会員選考委員長の私の3名でした。日程計画はロータリー会員JTB中国四国山口支店長の青木尚二氏の心の籠もった施策で、絶好の晴天と相俟って幸せ一杯でありました。

実は私は平成8年(1996)11月6日に旧記念館を訪れています。この年度私は米山梅吉記念奨学委員長でありましたので、是非訪れたいと念じていました。集団旅行の伊勢神宮参拝を済ませて、単独で15時過ぎ記念館を訪れています。その時、幾田常務理事(当時)、柏木事務員(当時)のご説明ご案内を受け、由緒ある記念館参観、お墓参りして米山梅吉先生のお家柄、ご遺徳を偲んだと当時の日記に認めております。

今回も記念館に到着後、米山家墓地を訪れ、米山梅吉先生の墓前に額ずきました。次いで新装完備の記念館展示室の記念品など参観、改めて実業家の偉大な存在を想起致しました。

14時から記念式典が開催されました。講師は(財)ロータリー米山記念奨学会理事長板橋敏雄氏、演題は「米山記念奨学会事業の現状と将来」でした。

今日は政治、経済、文化、教育、社会など人道上の諸問題は悉く国際社会での解決を俟たねば決着はつきません。国際親善及び平和に寄与する国際奉仕事業の一環を思う時、米山梅吉記念館及びロータリー米山記念奨学会に対し満腔の敬意と感謝を捧げます。

懇親会では、図らずも私に乾杯の音頭をと指名され、遠方から馳せ参じたことと高齢の故かと感銘を新たに、会の隆昌と会員各位の健康を祝して任を果たしました。17時30分、会は盛会裡に終了致しました。私達は別れを惜しみつつ、日程に従って伊豆修善寺湯回廊菊屋に向かって立ちました。

私の年齢になりますと何事についても人生観が伴います。「人生とは膨大な歴史である。歴史とは無数の人々の累積である。人は瞬時に歴史の中に埋没す

山口RC 松永祥甫

る。畢竟人生は邂逅である」これが私の人生観であります。

ところで埋没しない人があります。ここで3名の方に登場頂いて忘れ得ぬことを述べさせていただきます。

吉田松陰(1830~1859)

18世紀欧米諸国は産業革命により機械化が進み、挙がって東洋制覇、為に封建制幕藩体制下の日本は危急存亡の国難に際会していました。松陰は貧乏ながら堅実の家庭に生まれ育ち、生来の申し分ない非凡な天性と相俟って、武者指導の家系を継ぐ使命感に徹した教育を受けました。その教育者は愛に満ちた肉親の人々であります。長じて全国を踏破、先賢に学び万卷の書を読破、救国の使命貫徹を期して成らず、刑に服しては至誠気根の気概を以て師弟教育に一身を捧げ、遂に30歳の若さを以て刑場の露と消えられています。

日本の近代国家実現、明治維新の原動力のNo.1で志士、教育者、思想家として日本歴史には不朽の第一人者であります。夥しい遺文、書翰は人生の鑑と申して過言でありません。先見の明、又人道的奉仕者としても鑑であります。

米山梅吉(1868~1946)

封建時代を脱し黎明開花の明治維新、欧米との文化の格差を取り戻そうとする庶民躍動の時代の寵児として、米山梅吉はこの世に生を受けています。幼くして父を亡くし必ずしも家庭生活に恵まれているとは申し難いが天才少年は識者の認めるところと成り、或いは親族的身分関係、向学心への支援関係、加えて自発心により明治20年代に於いて、日本実業界における活躍者としての素地はできています。以後勝海舟、福沢諭吉をはじめ各界の人々の支援によって我が国一流の実業人として成功しています。

天性として人道的奉仕の精神の素地もあつてか、ポール・ハリス創造のロータリークラブを我が国に設置。奉仕の理想を追求して終生その活動には余念がありませんでした。遺徳を偲んで米山記念奨学会が創出され、国際親善に、世界平和に寄与している現況からしても米山梅吉の名はロータリーの存する限り不朽であります。

ポール・ハリス(1868~1947)

1776年独立宣言したアメリカは国民の開拓精神によって一世紀間に世界一の農業国、工業国に発展の一面、シカゴは20世紀前半にはニューヨークに次ぐ

大都市でありながらカポネに代表される暗黒街でもありました。

ここで10年間弁護士業で成功しつつあったポール・ハリスは、幼少以来あらゆる人生多岐苦難の経験を生かして、人道的奉仕の理想の実現を目指して、ロータリーの大事業に着手し、数多協力者の支援もあって世界一の奉仕団体として発展し、現にその貢献度は計り知れないものがあります。

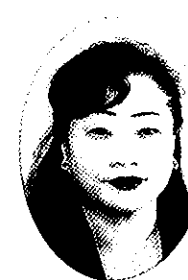
ポール・ハリスは生来非凡、進取の気性の少年で、これを温かく育成した清教徒で豊かな祖父母の養育、そして開拓精神に漲り、宗教心の厚いウォーリングフォードの生活環境がポール・ハリスの人物を育てたものと思います。長じては自己の強固な信念と高

度な品格が成功への大きな要素となっている感じがいたします。

最後に更に今ひとつ付言致します。大正13年4月に米山梅吉先生は徳川家達公と共に伊豆下田に赴いた際、静岡県育英会の為に吉田松陰先生に関し講演をした、との記録をみたことであります。やはりここにもご縁のあることを思い出しました。人生の在る限りご縁を大切に致したいものと申し添えてお礼の言葉に代えます。

松永祥甫氏は、ご自身の原稿が、館報に掲載されることを楽しみにしておりましたが、平成21年1月27日急逝されました。(享年97)
謹んでご冥福をお祈りいたします。(編集部)

(財)米山梅吉記念館 評議員会に出席して



平成20年8月23日「米山梅吉記念館」にて(財)米山梅吉記念館評議員会に出席いたしました。米山梅吉記念館は、築39年の旧館と築10年の新館

が有り、新館は静岡県東部の優れた建造物として知られています。会館の主な維持管理費用は、ロータリアンの寄付、特に第2620地区のロータリアンの皆様の浄財、全国年間一人100円募金や賛助会費等で賄われているとの会計報告に、評議員として厳しい現状を痛感しております。

最近は移動例会や記念館訪問また一般の方々の来館が増えています。10月に改訂になる新公益法人法により、更に一般の方々への公開が求められます。今後も維持管理がいかに必要になるか説明を受け、100円募金の有用性を再認識いたしました。

第2640地区では米山記念奨学委員長を拝命し2年目です。隔年に米山奨学生と米山カウンセラーとが地区米山

堺フェニックスRC 米田眞理子

記念奨学委員会主催で観光バスで見学に来させていただき、米山梅吉翁の偉業を理解する上で、米山梅吉記念館での研修ならびに会館内説明は大変有意義だと常々実感しています。私は今回で5度目の訪問をさせていただきましたが、何度訪れても素晴らしく、その上スタッフの皆様が温かく迎えてくださいます。ここに来ると日本のロータリーの原点にふれる事が出来、自分自身のロータリー活動の原動力になっていると実感し、いつも心が豊かになって帰路に着きます。第2640地区の2010年度-2011年度のガバナーを拝命しています。現在ガバナーノミニーとして地区大会や、機会ある毎に「米山梅吉記念館」の広報をしてまいりたいと考えています。



一昨年に第2640地区の米山奨学生と「米山梅吉記念館」を訪問した時

米山梅吉記念館での移動例会



永年の念願であった「米山梅吉記念館での移動例会」を2008年8月23日に開催することができました。米山氏が「日本ロータリーの父」と呼ばれる由縁は、日本で最初の会長だからではなく、高い教養と、国際的知識人として、またロータリーの信条である「超我の奉仕」を身をもって生涯実践した崇高な人物だったからではないでしょうか。

本宮ロータリークラブは1965年（昭和40年）に創立以来、米山功労者はチャーターメンバーも含めて25名となりました。受け入れた米山奨学生は4名と少ないですが、彼らとの付き合いの中で、会員の胸の内には、それぞれ思い出があると思います。本宮RCでは米山梅吉氏の提唱した運動に、長い間取り組んでいたにもかかわらず、米山梅吉記念館を訪問する機会がありませんでした。今回、はからずも移動例会の形で実現したことは誠に意義深く、今まで知らなかったロータリーを再認識する例会となりました。

本宮ロータリークラブは1965年（昭和40年）に創立以来、米山功労者はチャーターメンバーも含めて25名となりました。受け入れた米山奨学生は4名と少ないですが、彼らとの付き合いの中で、会員の胸の内には、それぞれ思い出があると思います。本宮RCでは米山梅吉氏の提唱した運動に、長い間取り組んでいたにもかかわらず、米山梅吉記念館を訪問する機会がありませんでした。今回、はからずも移動例会の形で実現したことは誠に意義深く、今まで知らなかったロータリーを再認識する例会となりました。

例会には、2530地区の米山記念奨学会委員長の加藤義朋氏も同行してくださり、講演を記念館の理事長渡邊脩助様をお願いしました。渡邊氏は、2620地区のガバナーも務めた三島RCの会員で、奇しくも福島県生まれの方でした。懐かしさを込めてお話いただきました。例会後は2階の展示室で市川真理学芸員が、皆の耳を惹きつけて離さない素晴らしい名調子で米山氏の生い立ちと活躍ぶりを説明してくれました。また次の部屋には、米山氏の沢山の著書、掛け軸、生活用品などが展示され、別な室にはロータリー（RI）の資料と写真、それに日本のロータリーの歴史の資料が沢山展示され、大きな銅板に日本歴代地区ガバナーの名が彫られ、その中に我が本宮クラブ



本宮RC 高田 宗彦

の国分雄太郎PGの名前を見つけた時は、1995年に本宮で開催された地区大会を思い出し胸が熱くなりました。又、『米山梅吉の覚音』の編集委員長井口賢明氏（沼津北RC）にお会いできたことも幸いでした。

記念館の庭には、ビチャイ・ラタクルRI会長がここを訪れた時の記念植樹と記念碑、入り口の横には、法隆寺の夢殿をかたどったとも言われる六角形の旧記念館があり、側には、ポール・ハリスが日本を訪問した時、帝国ホテルに記念植樹した月桂樹の孫に当たる木が植えてありました。記念館近くにある墓地の米山氏の石碑は実に質素で、戒名ではなく、正面には梅吉氏作の俳句が彫ってありました。

いさかいも なき漫々の 青田かな
生花を手向けようとした時、水が無いので周りを探していたら、にわか雨がザーと降ってピタリと止んだのには全員吃驚し、米山氏の嬉し涙かと誰かが叫びました。

墓参を終えて、はじめて、私にとって伝説の人であった米山氏が偉大なる身近なロータリーの大先輩になりました。その後、後ろ髪を引かれる思いで記念館を後にし、移動例会は無事終了しました。ここはロータリークラブの会員ならば一度は必ず訪問しなければならない聖地であると心から思いました。

米山記念館を訪ねて



ある日、2008-09年度会長幹事さんから次年度米山記念奨学会の委員長をお願いしたいとの要請があり、私としては

平成元年の6月に入会以来、ロータリーでの頼まれごとに対しては、「No」と言わない主義を通してきましたので、快く受諾させていただきました。

2008年5月16日には次年度の第1回委員長会議が開催され、その席上で「米山記念館の見学を兼ねた会員親睦旅行」を親睦活動委員会と合同で企画したい旨提案させていただき出席者全員からご賛同を頂き、早速準備に取り掛かることにしました。新年度が始まり記念すべき最初の訪問を何時にするか迷っておりましたが、板橋理事長にお伺いしましたところ、「秋の例大祭に合わせてみたらどうでしょうか」とのご指導を頂き、期日を9月21日（日）に決定しました。当初、参加者がどのくらいになるのか大変不安でしたが開催当日には会員、奥様方合わせて29名の参加をみることができました。もちろん理事長ご夫妻も一緒に、同じ車中で仲間と談笑しながら一路、記念館へ向かいました。

当日のお天気は生憎の雨模様で、午前中は静岡県長泉町のクレマチスの丘にある井上靖文学館やビュッフェ美術館で絵画を鑑賞し、午後は

足利東RC 山崎 勇

米山記念館を訪れ秋季例祭に出席し長谷川了氏の記念講演など約2時間にわたる記念館の見学でしたが、午後4時頃には他のクラブの皆様より少し先に失礼させていただきました。帰りの車中では米山奨学事業のビデオを見たり、カラオケで得意ののどを披露したり、和やかなうちに米山記念館を訪ねるバスツアーも成功裡に無事終了いたしました。

今年度の場合板橋敏雄会員の理事長就任と9月21日の米山記念館見学の行事が前後して行われ、クラブ内では大変な盛り上がりをもって10月の米山月間を迎えることができました。多くの会員各位が米山特別寄附に対し、好意と友情をもって協力していただいたものと大変嬉しく感謝の気持ちで一杯になりました。当初は多少プレッシャーも感じていましたが今年度の委員長をお引き受けして本当に良かったと思っています。

このたび私達の訪問にあたり、記念館の理事長様を始め事務局の皆様や維持運営に当たられている近隣のロータリークラブの皆様には色々とお世話になり厚く感謝と御礼を申し上げます。結びに日本ロータリー創設者米山梅吉翁の偉業を讃え、併せて記念館の益々のご発展を祈念いたします。



米山梅吉をめぐる —従吾会と白人会—

浜田 義一



本稿は、『熱海春秋』第3号(昭55.2)に掲載されたものを転載するものである。故浜田義一氏は、熱海市伊豆山で、桃季境という高級旅館を経営していた。そしてなかなかの文人、文化人で、その方の活躍は多彩であった。昭和28年から20年近くにわたり、熱海市立図書館の名誉館長をつとめた。昭和50年ころには、主導して、熱海市教育文化振興会を立上げるなどした。

『熱海春秋』は、その振興会の機関誌である。この創刊は、昭和52年10月である。毎年1回の発行を原則としていたようであるが、熱海市立図書館で、第7号(昭63.6)までは確認できたが、その後の帰趨はわからない。氏が平成元年9月に亡くなっているの、その号が最後かもしれない。

『熱海春秋』は、熱海ゆかりの文人、坪内逍遙や志賀直哉などについての原稿の他、氏がロータリークラブの会員であったので、米山梅吉にも目を向けたものがあり、本稿の他にも、創刊号に「米山梅吉翁」、第2号(昭53.10)「米山梅吉をめぐる」がある。氏が平成元年9月15日に亡くなった後、遺族により、遺稿集である『熱海文芸拾遺』(平2.9.15)が刊行された。本稿は、これにも所収されている。

本稿を見ると、氏の造詣の深さがうかがわれる。米山梅吉の文藻の面を知るうえで、貴重である。多くの人の目にふれてもらいたいものと思ひ、遺族の承諾をえて、転載することとした。

前記のとおり、氏はロータリアンでもあった。昭和29年11月から2ヶ月ほど沼津ロータリークラブに所属。熱海ロータリークラブが昭和30年1月、創設されるにともない、同クラブに移籍、さらに熱海南ロータリークラブが昭和36年6月、創設されて、同クラブに移籍した。昭46(1971)～昭47(1972)年度に、分区代理を務めている。

なお、本文中〔 〕内のものは、編集委員会によるものである。

米山梅吉は若い頃からの親友四人と語らって、従吾会という会をつくり、終生変らない交遊をつづけた。従吾会の五人の会員は、それを職としない者をも含めて、皆文筆に親しむ人々であった。その中で、評論家としても着々地位をきざきつつあった角田浩々歌客が、最も早く大正五年五十一歳で歿したが、米山は彼を悼む漢詩を作っている。その後大正九年には、歌客を偲ぶ次の短歌を残している。歌客と梅吉とは明治十四年沼津中学校以来の友であった。

春は四たび来にけり春は君
ゆきて寂しき今の時しる雨に

米山梅吉は、俳句や漢詩は早くから作っていたが、短歌は後年になってはじめてのものであった。梅吉ははじめて漢詩を作り出したのは、十六、七歳の頃からであり、二十歳頃までには長短数篇の作品があったが、後にこれらの作は皆

無用のものと思うようになり、アメリカに遊學している間に、これらの旧稿はほとんど散逸してしまつた。僅かに残つた数篇も、誦するに足るものではないが、捨てるに忍びないから回顧の為に収録するとして、五篇程「藍壺文藻」に残されている。その中に「懷徳川幕府」と題して沼津兵学校を詠んだ詩もある。

彼はアメリカに渡つて以来、全く詩作を絶っていたが、二十年後たまたま病を得て修善寺に百余日の間滞在していた所、従吾会の友人四人が見舞に訪れて、「三日唱和尽歛余獲七絶」として、七言絶句二首を作っている。三日間、友人達と話し合っている間に、詩心がよみがえつたものであろう。このように従吾会の友人達との交遊がきっかけとなって、再び彼は熱心に漢詩をつくるようになった。

梅吉は、俳句は恐らく漢詩より早くから作っていたことであろう。短歌をはじめてのはず

と後で、「藍壺文藻」に見える短歌は、昭和〔大正?〕八年の作が最も古いものであつて、先に引用した大正九年の歌客を偲ぶ作などもあるが、熱心に作歌をしはじめたのは、昭和八年頃からであろう。これについて、梅吉の短歌の師、佐佐木信綱博士は次のように書いている。年代では明らかではないが、ある時、三井集会所で一水会という短歌の会が発足し、梅吉もそれに出席した。これについて佐佐木信綱は、次のように書いている。

「自分(米山)は漢詩をまた俳句をものし、姓に因んで八十八山人とも号したが、京都の支店長時代、晩春のある日大津に赴いた時、逢坂の関のあたりで、実に美しい落花の吹雪にあつた。所謂関の清水の辺でこれこれと、くはしく話されて、あの日の光景は漢詩でも俳句でもない、歌に詠みたいと思うたが、如何やうに詠んだらばよからうかとのことに、自分(注、信綱)は暫く考え、これこれと詠んだらばというて十数年も前の落花の景を胸に深くとめておいでの貴方には、必ずよい歌がよまれると思ふというたに、爾年長い年月をたゆまず詠みいでられ、米国へ行かれた折は「八十七日」を、米国から欧州へ渡られた時は「東また東」を、庭の陶榻に巢を営んだ四十雀を詠んでは「四十雀」を刊行された。」

右〔前記〕は佐佐木信綱『明治大正昭和の人々』(昭和三十四年毎日新聞社)によつたが、『米山梅吉伝』の中の佐佐木信綱「米山君を偲びて」にも同様な、さらに詳しい記事が載っている。しかし私は、右の文中の京都支店長時代という所に、多少の疑問をもっている。米山梅吉は、明治三十五年に大津支店長に就任、その後東京、横浜と転任し、明治四十年から四十二年まで大阪支店長であつた。逢坂山の吹雪に感激したのは、いずれにしてもその頃の事であつたろう。

米山梅吉を中心とする従吾会の会員の一人、遅塚麗水は生前かなり読まれた作家であり、私もその作品を数点所有している。しかし、現在明治文学の特殊な研究家を除いて、彼の作品を読む人は殆ど皆無であろう。彼はまた、当時の

作家の多くがそうであつたように、紀行文を多くものにしている。特に『日本名勝記』上下二巻は著名であつた。いまその一節「伊豆の浦曲」の一部を紹介しておこう。

〔引用の部分省略〕

右〔前記〕に引用した麗水の『日本名勝記』は、明治三十一年春陽堂の発行であるが、私の所有しているものは、三十二年の再版本である。

米山梅吉は佐佐木信綱門下として、二、三の歌集を世に出しているが、短歌の道に入つたのは比較的後年のことである。漢詩は若い頃から作り、前述のように一時中止したこともあつたが、その後又、作詩にはげみ、終生変らなかつた。梅吉少年は父君の歿後、母堂の実家が三島大社の神官であつたため、一家その地に移り、長兄栄次郎が当時新設された映雪社〔舎〕という小学校の教師に就任した縁故によって、その学校に学び、その後長泉村代々の名主である米山家に迎えられて養子となつたわけであるが、映雪社〔舎〕の校長久我頑量という和尚さんは漢籍に通じていたというから、梅吉少年は幼にしてその影響を受けたことであろう。明治十四年頃、梅吉少年は沼津中学校に学んだが、沼津兵学校の流れをくむこの学校では、数学や英語の教育を重んじたが、一方漢学にも力をそそぎ、四書から史記列伝にわたるは勿論、漢文の作文を重んじていたという。その教育を受けた梅吉少年は、当時の多くの文学少年のたどつた道をたどる。著名な雑誌『頤才新誌』に投稿したのである。同じ頃夏目金之助もその雑誌に投稿をしていたが、漱石も梅吉と同じ明治元年生れであつた。筆者はまだ彼の投稿を確認していないが、梅馨という号で漢詩を発表していたものらしい。

米山梅吉はまた終生俳句に親しみ、藍壺等の俳名でかなりの俳句を残している。三、四年前に、米山梅吉の墓前に詣でたとき、今は亡き内藤卯三郎先生(元愛知学芸大学学長、物理学者、俳人)が、米山先生は何派の俳句を学ばれたのだろうか、と問われたことがあつたが、列席者

誰も応えることができなかった。『米山梅吉伝』の著者佐々木邦は、恐らく郷里の先輩角田竹冷の指導を受けたのであらうと書いている。竹冷についてはすでに詳しく述べておいたが、なお二、三附言しておきたい。

晩年の勝海舟が竹冷をひいきにしていたことは諸書に見えるし、巖谷小波によると、海舟は晩年その句を竹冷に見せていたらしい。一方、米山梅吉は明治二十八年にアメリカ遊学から帰って間もなく海舟に師事し、翌年発行した最初の著述『提督彼理』に海舟から題字をもらっている。又その間のエピソードなどは後年の梅吉の著『常識関門』に詳しい。梅吉が海舟に師事したといっても、それは海舟の最晩年のことであって、極めて短い期間であった。しかしその間に、海舟・竹冷・梅吉をめぐる何らかの関係があったのではなからうか。

一方、米山梅吉の俳句を語る上に見逃すことのできないのは白人会との関係である。これはまだ未調査の段階にあると思うので、特に一言しておく必要があると思う。白人会は明治三十三年に巖谷小波がベルリン大学附属東洋語学校の講師として赴任した時に、当時ベルリン在住邦人の外交官、軍人、留学生らが、小波を宗匠として迎えて作った俳句の会で、白人の名は伯林の伯からとり、なおシロウトの会であるという意味をも含ませているという。その会員の中には美濃部古泉（達吉）や芳賀竜江（矢一）等、後に大をなした多くの留学生の名がみえる。その創設は翌明治三十四年一月のことであったが、同じ頃バリーに居た邦人達も同様な俳句の会をつくり、巴里からとって巴会と名づけ、これ又小波の指導を受けた。この連衆の中には、浅井奎助（忠）、和田外面（英作）、中村不折等、明治洋画のパイオニアとなった画家達の名を見出すことができる。その後彼らは追々に帰国し、小波も帰朝したので、東京で白人会を続けてゆこうということになった。東京白人会の出発は、明治三十五年六月のことであったが、多くの新会員が加わったが、なかに角田竹冷、星野麦人らの名も見え、なかなか熱心に参加している。

病に苦しんでいた晩年の尾崎紅葉もこれに参加し、明治三十六年一月二十三日赤城清風亭という会場で、

泣いて行くエルテルに会ふ臆哉 紅葉

の一句を残している。まことに白人会むきの句であるが、しかし紅葉はその年十月三十日に死去してしまい、白人会に残したのはこの一句にすぎない。

十一月廿四日

紅葉子追悼於学士会

思ひ起す弦の響きや小六月 竹冷

此冬や遺書を抱いて籠るべう 小波

等の句が寄せられている。

米山梅吉が、いつ誰の紹介で白人会に入会したかは明らかではないが、大正六年一月十六日竹芝館での白人会の「春場所」という席題で、

場所の春立つや勘太が呼声に 尋九

春場所や人は桃色桜色 尋九

の句を残しており、どういういわれか知らないが、白人会ではずっと尋九という俳号を用いている。この二句は二つとも『米山梅吉伝』に収められた「藍壺文藻」の俳句選集にも載っている。同じ俳句選集には、

白人会

坐に奇人奇句あり空に奇峰あり

の句があり、白人会が種々様々な異色の人々の集りであり、奇抜な句が多かったことが伺える。米山尋九はこれらの人々に互してなかなか熱心に参加している。

同じ大正六年四月十四日、やはり竹芝館で、

春田（席題）

いさかひもなき漫々の春田哉 尋九

の一句を残しているが後に改作されて、

いさかひもなく漫々の春田哉

と現在の形になったのであらう。

米山尋九は角田竹冷の紹介で白人会に入ったのではないかと想像しているが、今は詳かでない。

い。竹冷は熱心に白人会に参加していたが、大正八年三月十七日の竹芝館の白人会において、

辛夷

明るさを辛夷咲きけり居士が窓 小波

窓近く翁茶を挽く辛夷哉 竹冷

暮るゝ日の辛夷の花に滅入りけり 尋九

古郷の庭前に咲く辛夷哉 竹冷

奥深き庭の主人や幣辛夷 尋九

暮れ残る辛夷の下灯哉 麦人

等多くの句を披露したが、翌々日の二十日に脳溢血で急逝した。竹冷享年六十四歳であった。米山梅吉は五月二十一日の白人会で、

十才にして俳人の名を星祭 尋九

と、竹冷を悼む句を残している。竹冷七歳の時の句、

朝顔や垣にからまる風の色

がよく人の口にのぼって、竹冷の幼い頃からの俳句の才能が云々されていたことを詠んだものであらう。

先にもふれたとおり、米山梅吉は八年間のアメリカ遊学を切り上げて、明治二十八年、帰国後間もなく勝海舟の知遇を得て、氷川海舟邸に通い、その最初の著書『提督彼理』（明治二十九年博文館）に海舟が題字を与えていることや、後年米山が青山学院で「常識講座」を担当し、その講義をまとめた『常識関門』（昭和十一年、実業之日本社）の中で、海舟の想い出を書き、福沢諭吉の「瘦我慢の説」にふれ、米山の最も尊敬する二大人物、海舟と諭吉の対立にふれていることも、よく知られている所であるから、ここでは省略する。また最初はジャーナリストを志していたらしい米山梅吉が、三井銀行に入社し、後には常務取締役、さらには三井信託を創立その社長となり、銀行家として一流の地位を占めながら、終始社会奉仕につくし、財団法人三井報恩会を創設、その理事長となり、結核予防等に尽力し、青山学院内に小学校を寄贈し、その財団法人緑岡小学校の校長、理事長をつとめ、さらには日本にロータリークラブを創

立したことなど、ここでは割愛することとする。

各方面にわたる米山梅吉の交遊の広さ深さは、どうい筆者のよく記すべき所ではない。白人会の会員たちとの交遊もまた十分にはわかっていない。ただ巖谷小波との交わりについては簡単にふれておきたい。梅吉につぎの句がある。

小波の千馬閣にて

分捕の馬もつなぎて青葉かけ

この千馬閣は千里閣の誤りであらう。蒐集癖の強かった小波は、東西古今の馬に関する器物、書画等を集め、明治三十九年から始めて、大正七年にはその品々が千点を越えたので、「千馬会」を催して蒐集品の公開を思い立ち、「千馬閣」という平坪十五坪の建物を建てた。これは大正十二年の震災に逢い、公開を中止したので、この米山の句は「千里閣」の落成式大正七年十二月一日か、或はその直後の作であらう。「千里閣」の建設及びその維持については、小波は多くの友人知己の援助を受けたというが、なかには「分捕品」も多かったであらう。梅吉の句はそれを詠んでいる。

明治三年生れの小波は、昭和五年に還暦を迎えたが、それを祝った梅吉の句がある。

小波還暦

還暦や夢を馬上に秋日和

このように米山梅吉は、先輩である角田竹冷や、三年後輩の巖谷小波などと共に、悠々とした素人俳人の境涯を楽しんでいたものと思われる。しかしまた正岡子規一派の俳句を無視していたわけではなく、

正岡子規の本などよみて

杜宇初音に飛べり燧灘

百年もきゝすまさんず杜宇

の句を残している。しかし筆者が疑問に思っていることは、明治十四年頃に同じく沼津中学校に学び、後に東海俳壇の雄となった蟹川他石との間に、俳句についての交流をまだ見出すことができない点である。

米山梅吉は何度も熱海に遊び、終戦の頃は熱

海山王ホテルで病を養っていたという。熱海に関する二、三の作品を紹介して筆をおこう。

(大正九年)

熱海路

山すそを切り開きたるかぐの實の
だんだら畠に霞たなびく

(昭和八年)

熱海の四季今様ぶり

伊豆のみんなみこの郷は 春にさきだつ
梅が香や 名もなつかしき桃山に さき
つぐ桜はなの波 来宮あたり鳴き過ぎて
初音手向くる杜鵑 海原わたる風すゞし
初島の燈もほの見えて 峠のながめ
十国の 秋をしめつゝタされば 月のひ
かりに人つどふ 金色夜叉の筆のあと
大嶋めぐり寄せきたる 浪あたたかに立
つ煙 わき出づる湯の高段は げに冬知
らぬこの郷ぞ

(昭和十四年)

去才の十一月冒されし風邪の、肺炎と
なり肋膜炎となり、未だかつて知らざ
りし疾の苦しみに、多き日を過せり。

今年二月二十日といふに、病院を退き、
熱海に転じ静養をつづけ、幸にして快
癒を告ぐることを得てしが、かれこれ
半才に及ばんとす。病中かきし責務を
果さざるべからず、心忙しさは云はん
方なし

胸の痛み針さす如し消えんとして

また燃えうつる炎の為とふ

生ありて再び起つも七十路の

翁大地をいかに踏まむ

熱海に在りし日

さくら花ちりての後の日を好しと

いたづきゆる我をおもへらく

(昭和十九年)

熱海に在りて

人のむねの真こそ歌に真をし

うたはばやがて歌の正道

七十まり七とせを今いたづらに

小さき器なほ成らずをり

俳句

魚見崎に笛も聞えて春の宵

春立つや大島の煙真直に

寄贈図書のご紹介

この度、米山梅吉の孫にあたる荒川健夫（平成14年2月ご逝去）著『激動の昭和を生きて』が寄贈されました。

この本は、荒川氏が生前書きためた原稿を、奥様の一代様が纏められたものです。

「私も祖父のような“国際人”になろうと思った」と記されているとおり、健夫氏が世界を股に掛けて活躍されていた様子が、生き生きと描かれています。



大正13年、祖父梅吉とともに
(前列左 健夫氏 5歳)

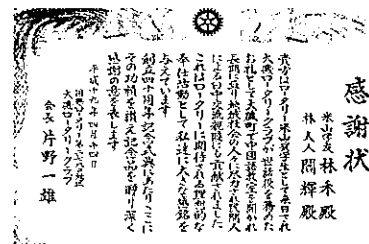
林禾君奨学金スマイル・ボックス物語

—アジア諸国に日本の高度水処理技術の普及—

大磯RC 河本親秀



ここに大磯ロータリークラブ創立40周年記念式典で林禾、閻輝夫妻に贈呈した感謝状がある。これは林禾夫妻が2001年から6年以上も大磯町民に中国語会話教室を指導してもらった事への感謝の証であります。



林君は1972年、中国福建省龍城市出身、淮南鉱業大学水文工部学を1996年卒業、工業庁

に研究員として就職、水質勘探を担当していた。林君は仕事を通して「中国は工業化が進むことで、工場での公害対策が不十分な事による産業公害は目に見えていて、人口が多く、水利用も複雑に入り組んでいる。環境問題、特に水環境の汚染はとても深刻な問題となる。そこで私は水が綺麗なことを世界に誇る日本へ留学する。学問修得後、帰国して、日本で身につけた知識を中国の環境保護と改善に生かせるような仕事づくりに微力ながら尽くしたい。」という思いで工業庁を退職、98年4月東海大学工学部土木工学科研究生として入学。99年4月修士課程に進み、その第2年度2000年4月に米山奨学生に選ばれ、大磯クラブにやってきました。

私達の前に現れた林君の人物は木訥・誠実・熱心、何時も笑顔で人に接する好青年で、クラブ全員から愛される存在となりました。

指導教授の茂庭先生の指導のもと水環境（水質浄化・保全）研究に熱心に取り組み、昼夜・休日を構わず研究所に出て、新しく開発した水処理装置を使って実験に励み、水質の高度浄化新技術開発チームの中心となって成果を上げ、NPO法人オゾン協会から「水道原水によるオゾン処理・促進酸化処理基礎実験」の独創性に対し論文奨励賞を受賞しています。大磯クラブには毎月出席すると共に卓話には何回も登壇し、中国の文化・風習などについて語って、我がクラブに預かった青少年交換来日学生の面倒をみしてくれるなどすっかり大磯クラブの1員になり

ました。

1年経って米山奨学金が終わり、博士課程に進むとき、文科省の奨学金が文科省の方針変更（中国留学生数削減）により貰えなくなり、生活と授業料の目途が立たなくなりました。状況を知ったクラブ会員がそれなら博士号をとるまでの最低の生活費は会員有志のスマイルで補おうと忽ち一決、それから博士課程3年間の林君スマイルが続きました。林君は思わぬ我々の申し出に感激、何かお役に立つことが出来ないかと申し出てくれました。

そこで大磯町民に中国語会話を教える事が出来ないかと相談したところ、以前に経験のあった林君は即座に承知してくれました。

その後、奥さんの閻さんに引き継がれた中国語会話教室は、閻さんの子育てが一段落するのを待って再開する予定。



中国語会話教室

林君は03年工学博士号を取得（高度水処理技術）、水処理事業を始めたばかりの日本の大手重電機会社に入社。中国水処理市場開拓エンジニアとして中国政府との折衝、設備の導入・建設・試運転の責任者として大多忙の日々を過ごしています。

大磯RCが米山奨学金制度のおかげで林君と出会って9年、米山記念奨学金→林君奨学金スマイル→中国語会話教室→大磯町民との親睦／交流。その上に林君の研究が花開き、祖国中国への貢献、更に国際社会への貢献を目指している林君の姿は米山記念奨学会の描く理想像ではないかと思えます。林君との関係は我々大磯クラブの誇りであり喜びであります。この機会を提供いただいた米山記念奨学会、またその大元を創られた偉大なる米山梅吉翁に思いを致すと共に深甚なる感謝を捧げる次第であります。

みずみずしい

玉村豊男さんの水彩画と、

本格ナポリピッツァと、

箱根 芦ノ湖。



玉村豊男
ライフアート
ミュージアム

LIFE ART
MUSEUM

玉村豊男ライフアートミュージアム
〒250-0622 神奈川県箱根町元箱根63
TEL:0460-83-1071 FAX:0460-83-1072
<http://www.tamatsunobu-museum.co.jp>

1997アンレストラ アクアパッツァテラス
ライフアートミュージアム内
TEL:0460-83-1074 FAX:0460-83-1708
<http://www.aquapazza-terrace.co.jp>

米山梅吉記念館のご案内

開館時間

午前10時～午後5時（但し11月～3月は
午後4時まで）

休館日

- 月曜日
- 12月28日～1月4日
- 整理のための休館日
（5月・8月の特定日）



米山梅吉記念館 館報

Vol. 13

発行日 平成21年3月15日
発行者 財団法人 米山梅吉記念館
〒411-0941 静岡県駿東郡長泉町上土狩346-1
TEL (055) 986-2946 FAX (055) 986-5101
URL: <http://yoneyama-umekichi.jp/>
e-mail: yumb@ai.tnc.ne.jp
印刷 フタバ印刷株式会社